様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１５１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０２１８３

研究課題名（和文）生命倫理問題に対する宗教的アプローチと障害学的アプローチに関する比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of Religious and Disability Studies Approaches to Bioethical Issues

研究代表者
安藤　泰至（ANDO, Yasunori）

鳥取大学・医学部・准教授

研究者番号：７０２８３９９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：生命倫理問題、とりわけ誕生と死をめぐる倫理問題について、既存の生命倫理学における手続き的「自己決定」重視を批判して「生活」や「いのち」の全体を考慮する点や、医学・医療特有のものの見方やそこに隠された優生思想を批判する点で、宗教的アプローチと障害学的アプローチの間には共通点がある。他方、「よい死」への希求をめぐる言説について、障害学のアプローチは障害当事者の生命を圧殺するものとして批判するのに対し、「死の自覚」や「死の受容」を説いてきた宗教からのアプローチではこの点について甘さが見られる。両者のアプローチの比較は、生命倫理問題における「当事者」の複数性と多元性についてのさらなる省察を要請する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は生命倫理問題における宗教的アプローチと障害学的アプローチの比較についての初の本格的研究であり、複数の分野で学術的意義を有する。医療や福祉、生命倫理などにおける宗教的な物の見方の意義に焦点を当てる本研究は、宗教学における近年のスピリチュアリティ研究や社会貢献研究を引き継ぎ、発展させる。生命倫理学における医学・医療的な物の見方の相対化という面では、生命倫理学にも寄与するところが多く、障害学や障害者運動に対しても別方向からの視点を提供しえるものである。コロナ禍で「いのちの選別」が問われる社会的状況のなかでさまざまな立場の研究者、当事者、支援者との議論・対話を進める上での社会的意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：Regarding bioethical issues, especially those concerning birth and death, there are similarities between the religious approach and the disability studies approach in that they criticize the emphasis on procedural "self-determination" in existing bioethics and consider "seikatsu" and "inochi" as a whole, as well as in that they criticize views unique to medicine and the eugenics ideology hidden therein. On the other hand, the disability studies approach criticizes the discourse on the seeking a "good death" as crushing the lives of people with disabilities, while the religious approach, which has taught "awareness of death" and "acceptance of death," is more lenient on this point. A comparison of the two approaches calls for further reflection on the plurality and pluralism of "interested parties" in bioethical issues.

研究分野：生命倫理・死生学・宗教学

キーワード：生命倫理問題　誕生と死　いのち　宗教　スピリチュアリティ　障害者運動　障害学　生命倫理学批判

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

生命倫理において障害や障害者と関係するテーマは多い。出生前検査で胎児の（将来産まれてからの）障害が判明した場合の中絶（選別的中絶）をめぐる倫理的問題、障害者に健常者と平等な医療へのアクセスが保障されていないという問題、障害者が本人同意を欠いた非倫理的な人体実験や妊娠中絶・不妊手術などの犠牲者になってきたという問題、障害者が「安楽死」や「尊厳死」の名のもとに生きる権利を奪われてきたという問題などである。

しかし、こうした問題について、従来の学問としての生命倫理学（bioethics）は医学・医療の枠組みを相対化しないままに「患者本人の自己決定」をふりかざすことで、障害者たちによる問題提起に蓋をしてきたという面がある。筆者はアリシア・ウーレット『生命倫理学と障害学の対話』（生活書院、2014年）を児玉真美と共訳した経験から、障害学や障害者運動からの（既存の）生命倫理学批判と、筆者がこれまで宗教学研究者として行ってきた生命倫理研究における（広い意味での）宗教的観点からの（既存の）生命倫理学批判には、多くの共通点があり、密接な相似的関係があることを認識、自覚するに至った。

２．研究の目的

1990 年代以降、現代の医学・医療や生命科学の発展とともに生じる倫理問題を論じる枠組みとしての既存の「生命倫理学」に対する批判は、さまざまな観点からなされてきており、そのなかに（広義の）宗教的な観点からの批判と障害者運動や障害学からの批判も挙げられる。出生前診断による選別的中絶や安楽死の問題に対する両者の代表的見解のように、両者からの批判には共通する点があることはこれまでにも指摘されてきたが、生命倫理問題へのアプローチとして両者を比較するような研究はまだなされていない。本研究は、さまざまな生命倫理問題、とりわけ障害（disability）という要素がそこに関係するような諸問題に対する（広い意味での）宗教的アプローチと障害学的アプローチについて、両者を比較し、両者がどのような観点を共有しているか、逆に両者がもっている互いに相容れない観点あるいは対立する観点はどこにあるのかを明らかにすることを目的としている。

３．研究の方法

本研究は、文献研究およびインタビュー調査の二つの方法を両輪として計画されている。文献研究はさらに、生命倫理問題における宗教的アプローチと障害学的アプローチの相互関係を照射する日米の二人の思想家（糸賀一雄とスタンリー・ハワーワス）の思想研究、および生命倫理問題の各トピックごとに宗教的アプローチと障害学的アプローチ双方からの言説を比較し、その類似点と相違点を同定するともに両者の構造的関係を解き明かす理論研究の二つから成る。

インタビュー調査は、これまで障害をめぐる生命倫理問題について問題提起や社会的発言を行ってきた何人かの障害当事者ないし家族、および生命倫理問題には直接発言はしていないが障害当事者としての社会活動のなかから宗教的とも言える活動を展開してきた人物を対象とし、本研究における文献研究（思想研究および理論研究）から得られる知見を「広い意味での当事者の語り」を通じて確証するという二重の方法を用いた。

４．研究成果

（1）まず本研究で対象とする宗教的アプローチと障害学的アプローチの双方が着目し、既存の生命倫理学を批判している生命倫理問題のトピックの代表的なものとして、①優生保護法下における共生妊娠新忠節、②出生前診断と選別的中絶、③脳死臓器移植、④安楽死の諸問題について取り上げ、それらに共通する問題点を抽出し、それと両者のアプローチがともに批判する優生思想や「いのちの選別」との関係を明らかにした。②、③、④については文献1で、①、②、④については文献2で論じた。両者のアプローチに共通する点は、医学・医療に特有なものの見方を相対化し、「自己決定」の大冊差を訴える場合でも、単にある時点での医療上の意思決定やその正当性の確保ではなく、人の「生活」や「いのち」の全体を踏まえた上での当事者の決定ということを重視していることを明らかにした。このことは、糸賀一雄およびスタンリー・ハワーワスの思想研究によっても、キリスト教牧師で社会福祉専門家（障害支援者）である深谷美枝や、医師であり長らくびわこ学園院長として重症心身障害児のケアに携わってきた高谷清のインタビュー調査によっても跡づけられた。

（2）本研究のさなかに、コロナ禍が生じるとともに、京都ＡＬＳ女性嘱託殺人事件をめぐる報道（2020年7月）などがきっかけになって、トリアージや「いのちの選別」といった問題が喫緊の議論になったこと、とりわけ後者の安楽死議論については筆者自身が安楽死反対派の生命倫理研究者として多くの社会的発信を行ったこともあって、そのなかで、多くの障害当事者や宗教関係者と議論、対話する機会をもてたことは、本研究の遂行にも大いにプラスになった。そのなかで明らかになってきたのは、安楽死肯定言説の根本にある「よい死」への希求に対して、障害者運動や障害学では障害者の生存を脅かすものとして批判する傾向が強いのに対し、宗教的な言説ではあまり批判が行われていないという、両者の相違点であった。宗教が「死（という宿命）の自覚」や「死の受容」を説いてきたことからの影響がうかがえるが、現代の医学・医療の言説のなかに潜んでいる隠れた優生思想を批判する上でそれが不十分であることについては、文献3や文献4、および文献5の第2章で論じた。また、糸賀一雄の思想と優生思想の微妙な関係については、宗教哲学会における糸賀の福祉思想と宗教性をめぐる学会発表で論じた。

「トリアージ」の問題についても、同様に障害者運動の側からは大いに批判が寄せられているのに対し、宗教の側からの反応があまり見られないのはこのこととも関係していると思われる。現代における「トリアージ」の語の複数の使われ方とそれによる混乱について、また生命倫理学の歴史において、それがどのように位置づけられるのかについては、文献6で明らかにした。

（3）本研究では上記の（2）をめぐる議論や対話にも関連して、生命倫理問題における「当事者」の複数性と、それぞれの当事者がどのような意味で当事者性を帯びているかについても多次元的であるという現実が浮かび上がってきた。こうした事態については、文献5の第3章で論じたが、筆者が企画した本年11月の日本スピリチュアルケア学会のシンポジウム「複数の当事者と当事者の多元性―スピリチュアルケアのまなざしはどこに向けられるのか？」を皮切りに、今後の継続的研究課題である。

このことは、障害当事者であるとともに障害児の親でもある僧侶・花岡尚樹のインタビューや、浄土真宗の寺院に生まれた門徒の医師として多くの患者を看取ってきた金谷法忍のインタビュー調査によっても跡づけられた。

文献

1、安藤泰至「生命操作システムのなかの〈いのち〉―生の終わりをめぐる生命倫理問題を中心に」、香川知晶他『〈いのち〉はいかに語りうるか？―生命科学・生命倫理における人文知の意義―（学重油津会議叢書24）』、公益財団法人　日本学術公益財団、2018年
2、安藤泰至「優生思想と「別のまなざし―宗教・いのち・障害と共に生きること―」、『宗教と社会貢献』8巻1号、3-23頁、2018年
3、安藤泰至「「死の自己決定」に潜む危うさ」、『すばる』2020年4月号、集英社、172-181頁、2020年
4、安藤泰至「私たちは「よい死」を語りすぎていないか？」、『老年精神医学雑誌』33巻6号、555-564頁、2022年
5、安藤泰至・島薗進（編著）『見捨てられる〈いのち〉を考える―京都ＡＬＳ嘱託殺人と人工呼吸器トリアージから―』晶文社、2021年
6、安藤泰至「選別なきトリアージとトリアージなき選別―「トリアージ」という語をめぐる混乱と錯綜」、土井健司・田坂さつき・加藤泰史（編）『コロナ禍とトリアージを問う―社会が命を選別するということ』青弓社、2022年

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 安藤泰至	４．巻 33－6
２．論文標題 私たちは「よい死」を語りすぎていないか？	５．発行年 2022年
３．雑誌名 老年精神医学雑誌	６．最初と最後の頁 555－564
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安藤泰至	４．巻 6-1
２．論文標題 「よい死」を目指すのはよいことなのか？	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本エンドオブライフケア学会誌	６．最初と最後の頁 13-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安藤泰至	４．巻 2020年4月号
２．論文標題 「死の自己決定」に潜む危うさ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 すばる	６．最初と最後の頁 172－181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安藤泰至	４．巻 8（1）
２．論文標題 優生思想と「別のまなざし」―宗教・いのち・障害と共に生きること―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 宗教と社会貢献	６．最初と最後の頁 3-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計23件（うち招待講演　6件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 安藤泰至
２．発表標題 安楽死は医療行為なのか？―ベルギーの安楽死批判本を手がかりに考える――
３．学会等名 第41回日本医学哲学・倫理学会大会　コロキウム2
４．発表年 2022年

１．発表者名 安藤泰至
２．発表標題 安楽死は「問題解決」のための選択肢なのか？
３．学会等名 第34回日本生命倫理学会年次大会　大会企画シンポジウムⅠ
４．発表年 2022年

１．発表者名 安藤泰至
２．発表標題 生命操作におけるデザインと排除―「安楽死」はなぜ生命操作の一部なのか？　―
３．学会等名 第３３回日本生命倫理学会年次大会　公募ワークショップ
４．発表年 2021年

１．発表者名 安藤泰至
２．発表標題 糸賀一雄の福祉思想における宗教性―実践のなかで鍛えられる宗教哲学―
３．学会等名 宗教哲学会第12回学術大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 安藤泰至
２．発表標題 人の生殖への技術的介入はどこまで許されるか？―人文学の観点から―
３．学会等名 ２０１９科学技術社会論学会公開シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 安藤泰至
２．発表標題 ヒト生殖細胞系ゲノム編集の倫理―その論点と公的議論のあり方―
３．学会等名 第30回日本生命倫理学会年次大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 安藤泰至
２．発表標題 障害とスピリチュアリティ―スピリチュアリティ理解に見られる傾きへの批判として
３．学会等名 日本スピリチュアルケア学会第１０回学術大会（京都府）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計7件

１．著者名 土井健司・田坂さつき・加藤泰史（編著）　（安藤泰至）	４．発行年 2022年
２．出版社 青弓社	５．総ページ数 217
３．書名 コロナ禍とトリアージを問う（第7章　選別なきトリアージとトリアージなき選別）	

１．著者名 安藤泰至・島薗進（編著）、川口有美子・大谷いづみ・児玉真美（著）	４．発行年 2021年
２．出版社 晶文社	５．総ページ数 260
３．書名 見捨てられる〈いのち〉を考える―京都ＡＬＳ嘱託殺人と人工呼吸器トリアージから―	

１．著者名 安藤泰至	４．発行年 2019年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 62
３．書名 安楽死・尊厳死を語る前に知っておきたいこと	

１．著者名 香川知晶・斉藤光・小松美彦・島薗進・安藤泰至・轟孝夫・大庭健・山極壽一	４．発行年 2018年
２．出版社 公益財団法人　日本学術協力財団	５．総ページ数 271
３．書名 〈いのち〉はいかに語りうるか？―生命科学・生命倫理における人文知の意義―（学術会議叢書24）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関